
ロボスの娘で行ってみよう！

三田弾正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロボスの娘で行ってみよう！

【Nコード】

N9323Z

【作者名】

三田弾正

【あらすじ】

銀河英雄伝説の同盟側で書いてみたいという気持ちで、書いたのですが、

他の2つが忙しいので取りあえず書いた感じですが、

ロボス元帥の娘になってみようと言う感じの物語です。

第一話 銀英伝へこんにちは（前書き）

なんか、書きたくなっただけど、
続くかは不明です。

第一話 銀英伝へこんにちは

ある日、メゾネットタイプマンションで、38歳独身OLがOV
A銀英伝を見ながらラインハルトやヤン批判をしながら酒飲んでく
だを巻いていた。

「やっぱ、クソ餓鬼は嫌だね。ヤンも甘ちゃんだけどさ未だマシだ
よね」

先ほどから10本目のチューハイを開け飲み始めた。

「プファー旨いねー、梅酒サワー最高！」

「大体ヤンもヤンだよな。イゼルローン要塞取るんじゃないで壊し
てしまえば良いのになー！」

支離滅裂な言動である。

「ウゲー、気持ちわるートイレトイレ」

そのままトイレに吐きに行く途中階段から足を滑らした彼女はそ
のまま頭部を強打し、

自分が死んだことも気づかずに、あの世へと旅立ったのである。

んー痛たたた。真っ暗じゃん今何時だ？

ん？腕時計が無いな。どっかへ落としたっけ？

ん？目が慣れてきたな。はあ？何だこの手はスゲー小さいぞ、まる
で子供の手じゃん！

おっ電気が付いたけど、ここ家だよな誰か来るじゃん、泥棒かよ！
まじーぞ、動けないんだよー。縛られたか！

犯される！！声を出そうとするんだが、叫び声しかでねーぞ！

出川哲朗じゃないけど。やばいよやばいよ！！

「あらあら、リーファちゃん起きたのかしら？」
「はっ？英語かよしかも女の強盗かい！」
「女が近づいてくる、しかもでかい巨人だ！」
「ゼントラルデー人程じゃないが十分な巨人だ。」

巨人の強盗って何なんだよ！

「リーファちゃん、おしめを替えましょうね」
「脱がせられる、?????んちよと待て落ち着こう。」

今の状態は巨人に抱かれて居る。

体を見よう、???????

あ”！小さいじゃんか。赤ん坊の体だけ！！

夢ですかね、夢ですね。飲み過ぎで眠ってるんだな、じゃあ又寝ようお休みなさいー！！

「あらあら、リーファちゃん気持ちよくて眠っちゃたわね」

リーファです、15歳になりました。いやはや夢だと思っていた赤ん坊の時期が懐かしいですね。

まさか死んでるか、意識不明か判りませんが、変な世界へ転生したみたいなんですよね。

転生ですよ2次小説に良くあるやつですが、神様が出てチートくれるとかは全く無し何なのか不明ですよ。

ある程度判るようになったのが5歳を越えた辺りからで、

この世界が宇宙暦を使う世界で同盟軍だとか帝国軍だとかの世界と

聞いた時は、

銀英伝だと思いましたよ。

調べてみるとまさに銀河英雄伝説の世界でした。

私は、自由惑星同盟に生まれたわけでした。

帝国ならラインハルトを排除してイケイケドンドン出来るかも知れないけど、

同盟じゃねー、先行き不安じゃないですか！

生まれた年は宇宙暦768年7月22日なんですけどね。

これってヤンとアッテンボローの丁度中間なんですよ。

それは良いんですが、両親がていうか、父親が問題でしたよ。

「おーい、リーファ。そろそろ出かけんと士官学校の入学式に遅刻するぞ」

「はい。お父様」

「うむ、お前も士官学校へ入るのなら、トップを目指せ。

我がロボス家の誇りになるのだ！」

「はい」

「では向かうとするか」

そうなんですよ、私の名前は、リーファ・ロボス。後の宇宙艦隊司令長官ロボス元帥の娘として生まれてしまったんです。

あー、キャゼル又先輩か、グリーンヒル大将の子に生まれたかった。嘆いてもしようがないので、何とかしようと思いましたが士官学校へ行くことに成ってしまったのでした。

取りあえず、銀英伝の世界へ来たときから、覚えている限りの原作知識を書き写しておきましたよ、いつか役に立つんじゃないかと思っただけね。

士官学校の試験に役立つとは思いませんでしたけどね。

入学式は滞りなく終わりましたよ。
シトレ校長の訓辞も全然長くないですから、考えるにヤンの超短いスピーチの原点かも知れませんか。
ヤンとかラップとかワイドボーンを見つけようとしても判らないですね。

入学試験で4880人中4番だったそうなのですが、
そんなに難しい試験はじゃ無かったんだけど、
前世で21の時受けた海上自衛隊の幹部候補生テストより簡単だったんだけどね。

無論受かりましたよ、けどね30歳の時セクハラされて辞めたんだよね。

くそー！今でも頭に来る！！

今度しやがったら、只じゃおかねーぞ！！

まあロボスの娘にちよっかい出す奴は居ないだろうけどね。

まあ4年間ゆるゆるとやりますか。

まずは人脈づくりだね。

ヤンとラップに会いにいけたらいいこと。

第二話 士官学校の日々（前書き）

ヤンやアツテンボローやラップやキャゼル又と知り合います。

第二話 士官学校の日々

宇宙暦785年7月

士官学校に入学してから、既に1年経ち座学に実技とやって来ましたが。

苦手な科目がある事が判明しました。

それは戦闘艇操縦訓練、シミュレーションなんですけど、

前世から3D戦闘とかが超苦手で、航空戦とかだと目が回るんですよ。

この世界なら大丈夫かと思ったら、気持ち悪くなって内部で吐きましたよ。

前代未聞とまでは行かないが、これで戦闘艇操縦訓練は毎度毎度下呂袋持参に成りました。

結局戦闘艇操縦訓練の成績がなんと赤点ギリギリの56点。ヤンより悪いです。

親父も最初は怒ってましたが、体質的なモノと判ると仕方がないと諦めてくれましたし、

他の教科は軒並み90点越えでしたからそれで相殺してくれました。同期からは、袋の君とか渾名付けられましたけどね。

ワイドボーンは新学期の説明で総代として皆を教えしてくれたので見知りでしたが話すほどでは無いです。

ヤンは戦史科らしいので行ったんですけど居たことは居たんですが余り行くに変な顔されると嫌なので取りあえず遠くから見ているだけにしました。

ラップは何処に居るやら判らないので未だに会ってません。
ジェシカは居ましたけど、それほどお近づきにならない状態ですよ、
何となくですけどね。

親父と校長が25年来のライバルなので校長から何か言われるかと
思いましたが、
流石校長ですね、平等に扱ってくれますよ、此が家の親父なら依怙
鼻屑や毛嫌いばかりですからね、
我が親ながら情けないたらありやしない、だからフォークやホーラ
ンドの阿呆を重要視するんですよ。

それで今日は2年になってアッテンボローが入校してくるんです、
楽しみですね。

キャゼル又先輩も今年事務局次長として配属されてきたので人脈造
りをしますよ。
まあ私は戦闘艇操縦訓練が足を引いて、成績が一桁台にならないん
ですよ。

入校式が行われて入校してくるんですが、説明はクラスヘッドがし
てますからね、
私は関係ない状態なので、日向ぼっこしながら歴史書読んでます。
暇ですね、太陽が眩しいですね。

どうせこのまま行っても、同盟はラインハルトに潰されるわけだし
て、
何とかしようにも、アホ政治屋やアホ参謀達を何とかしないと駄目
なんですよね。
自分が偉くなれるかですけど、女じゃフレデリカみたいにヤンの副
官とかしないと駄目ですからね。

しかもこの世界、150年も戦争しているから、すっかり人的資源が枯渇気味で大変なのです。

人材育成も若年兵をカリンなんか15歳ですよそんな子達を使うなんて末期的ですよ。

下手な戦闘ばかりして毎年数十万を殺してるんですから。

感覚的に言うと第二次大戦末期のドイツ軍や日本軍状態ですよね。

経済もボロボロですし、資料見れば見るほど頭痛くなりますよ。

士官教育が促成になってないだけ未だマシですが、

戦史研究科が廃止される事態で既にOUIです。

資料を見ていると、ラインハルトが出てこなくてもギリ貧で国が潰れてたんじゃ無いかと思えるです。

ルーティアマト会戦とかヴァンフリートとかは無駄な戦いですからね、

それを止めるだけでかなりの戦死者を減らせるはずなんですよね。

まあこうなれば、親父を利用して宇宙艦隊参謀になって、フォークのアホをパージしなきゃだね。

まあラインハルトを殺せば良いんだけど、

あの金髪チートだらけだらうし運ばかり良くて、死なないんだよね
！。

死なさないで失脚を狙うのが良いんだらうけど無理だよな。

あーどうしたら良いやら、考えよう。

あー、もう夕方か今日は自習だったから大丈夫だらうけど、そろそろ帰らないと駄目だね。

今日はヤンがワイドボーンを破つたのと同じ、戦術コンピューターをつかった、シミュレーション戦闘です。まあ2番煎じなのですがね、弱い相手にはそれなりに。強い相手にはラインハルトや双壁やヤンの戦法を採用していますよ。

U型陣とか、補給線切断だとか、中央突破背面展開とか、ジャンジヤン原作知識で使いまくっています。

だってどうせ、実戦なんか親父が許してくれないはずだもん。

後方に置きたがっているのが判るのが、受けた科が兵站科ですからね。

シトレ校長も惜しいと言ってくれてますけどね。

目指せ2代目、キャゼルヌと行きますか。

お腹すいたら兵隊は働かないですからね。

日本陸軍のように、輜重兵を馬鹿にした拳げ句に餓死連発の軍隊は駄目ですよ。

親父もグランドカナル事件やったり、帝国領侵攻作戦で補給軽視で失敗してますからね。

この軍隊アホの集まりですか？

大体参謀教育がまともじゃないし、大戦果あげただけで、提督へ昇進とかあり得ないぜ。

だからあんなアホのフォークやホーランドが出てくるんだよね。

おっ私の又番ですな。

今度は負けましたね。結局学年二位でしたよ。まあ良いところでしよう。

けど負けた同期、全然原作に出てこないんだよね、

モブキャラなのかな不明だね。

そうそう、キャゼル又先輩と知り合いになりしたよ。
書類出しに行つて挨拶してきました。

いい人ですよ正しく、私が兵站科だと聞いたら兵站の苦勞を思いつきりお話ししてくれました。

ヤンにも会うことが出来たんですけどね、

ごく普通に話すだけです、自分は784年度10位ですけど、

ヤンは783年度1900番台ですからね、

まあキャゼル又先輩の所へ入り浸つて居るので自然とヤンやラップやアツテンボローとは知り合いになりましたよ。

宇宙暦785年12月

同盟軍士官学校 事務局次長室

「おいアツテンボロー、お前さん怪しげな地下組織を作つたらしいな」

「キャゼル又先輩の薰陶のお陰ですよ」

「ぬかせw」

「まあアツテンボローは反体制派だからね」

「ヤン先輩それは酷いですよ。そうだらップ先輩、良い本がありますよ読んでみませんか」

「ハハ、そうだね」

「おい、アツテンボロー、セクハラ紛いの本だとやばいから、気を

付けるよ」

「大丈夫ですよ、その辺はね」

「何と言っても、ロボス大将のご令嬢が此処へ出入りしているんだから、セクハラで訴えられるぞ」

「リーファ先輩の事ですね、先輩なら大丈夫ですよ。」

何と言っても我らの有害図書愛好会の有力なスポンサーの1人ですからね」

「本当かい、提督が聞いたらアッテンボローお前、宇宙へ素っ裸で放り出されるぞ」

ニヤニヤとキャゼル又が話す。

「そりゃたまらんですな、リーファ先輩には秘密を厳守してもらわなきゃ」

「アハハ、そうだなアッテンボロー、素っ裸で宇宙遊泳はたまらんな」

「ラップ先輩、酷いですよ」

「あら、私の悪口かしら、アッテンボロー」

いきなり入ってくるリーファにアッテンボローがビックリする。

「えーと先輩何時からドアの外に居たんですか？」

「スポンサーの辺りからかしらね」

「じゃあ、お願いします。絶対に言わないで下さい」

「宇宙遊泳見て見たいなっけたりして」

ニヤニヤ笑うリーファ。

「リーファ大先輩マジ勘弁」

「アッテンボローは女姉妹の末っ子だから女性には弱いんだな」

「ヤン先輩フォローになってないですよそれ」

「いいわ、私も怒られたくないから、黙ってますよ」

「先輩マジ感謝です」

「ニヤツとする、リーファ。」

「その代わりに、今度の休日に私とデートしなさい」

「えっ」

「あら、嫌なの？自慢じゃないけど私、士官学校でも5本の指に入ると思っわよ」

「ぼそっとヤンとラップが言い合っている。」

「女傑度はN01だけどね」

「先輩、聞こえてますよ。けど自覚してますから良いですけどね」

「アッテンボロー、男冥利に尽きるじゃないか、精々エスコートして差し上げるよ」

「酷いですよキャゼル又先輩」

「ていうわけで、来週の日曜はどっかへ連れて行きなさい」

「ガツクリする、アッテンボロー。」

「判りました、リーファ先輩」

「判れば宜しい」

「所でリーファなんか用があつたんじゃないのか？」

「あつ忘れてました。今度の射撃訓練で使う実包の補給をお願いしに来たんです」

「ブラスターやビームライフルじゃなく、実包か」

「ええ、その方が撃ちやすいんですよ」

「変わったモノだな、普通反動のない方が撃ちやすいんだがね」

「まあ相性ですね」

「リーファは射撃がうまいからね。私なんかと段違いだ」

「ヤン先輩は射撃は駄目でもシミュレーションでワイドボーン先輩を破ったじゃないですか」

「まあね」

「それは素晴らしいですよ、私は先輩の戦術を参考にしているんですから」

「それでもリーファ独特の戦法も有るじゃないか」

「ええ。古今東西の戦史を読んで、研究してますから」

「流石、校庭の沈黙クイーンですね」

「なんだいそりゃ?」

「校庭の片隅で本読んで集中しているから付いた渾名なんです」

「はは、そりゃいい」

「キャゼル又先輩酷いですよ」

「リーファ戦史を読んでいるのかい」

「ええヤン先輩」

「今度良かったら、本を貸してくれないかい」

「ええ喜んで」

「ありがとう」

昼休みが終わるベルが鳴り始めた。

「おつと時間だぞ、学生は早く授業に戻れ」

「はいー」

「了解です」

「はっ
」

「キャゼル又先輩宜しくです」

「やれやれ、騒がしい連中だ、俺も仕事を始めるか」

第三話 クリスマスで苦しみます(前書き)

アッテンボローが苦しみます。

第三話 クリスマスで苦しみます

宇宙暦785年12月24日

自由惑星同盟首都星ハイネセン テルヌーゼン市

地球時代ではキリストの生誕日の祭りであったこの日も宇宙時代になってもお祭りであることには変わりがなかった、自由惑星同盟では各種民族の集まりであるが上、銀河帝国と比べてクリスマスが大きなイベントとして各地で祝られていた。

また男女のカップルも多く見られ、今日此からの日々を期待して居る者達などが多くいるのであった。

その中に、銀灰色の髪の毛をセミロングに纏めた18歳ぐらいの少女と、もつれた毛糸のような鉄灰色の髪の毛でソバカスが未だ目立つ青年が連れだって歩いていた。

「さああ、ダスティー行くわよー」

「先輩、何処行くんですか？」

「あら、先輩じゃなくて、リーファって呼んでよね」

「リーファ先輩、ディナーって言っても、自分じゃ店をよく知らないですよ」

「ふふふ、そこは任して、良い店を予約してあるから付いて来なさい」

「はあ」

「ダスティーそんなに私が嫌なのかしら？」

「いえ、そう言う訳じゃ無いんですが」

「苦手なんでしょう。だから誘ったんじゃない。少しは女性になれておかないと何れ大変よ」

「さあ着いたわ」

「此処ですか。随分高そうな店ですが」

「ダスティー行くわよ」

アッテンボローはリーファに腕を組まれて連れて行かれる。ボーイにリーファが話しかける。

「予約しているロボスですけど」

「はい、お待ちしておりました、お連れ様は既にお待ちでございます」

「リーファ先輩、自分以外に誰か呼んで居るんですか？」

「会つてのお楽しみよ」

「はあ」

「此方でございます」

「ありがとうございます」

「リーファ遅かったな」

そこにいたのは父親のロボス大将であった。

その隣にはリーファが年を取ったような感じの令夫人がにこやかに座っていて、

その他20代後半のロボス大将によく似た青年が座っていた。

「お父さん、お母さん、お兄さん、久しぶりです」

「リーファ、彼が話してくれた人ね」

「そうよ、お母さん、ダスティー、両親と兄に挨拶して」

アッテンボローは、うげー嵌められたと思ったが退路を絶たれて逃げようがないので腹を括った。

「初めまして、ダスティー・アッテンボローと申します、
本日は御家族の団欒にお邪魔して申し訳ありません」

ロボス大将が値踏みするように、ジロリとアッテンボローを見ている。

「儂がリーファの父のラザール・ロボスだ」

「私はリーファの母のマリーヤ・ロボスよ」

「小官はリーファの兄で同盟軍少佐、シャルル・ロボスです」

アッテンボローは完全にリーファに捕らえられた蝶々の様になっていた。

「まあ座りたまえ」

「はっ」

「所でリーファと付き合い始めてどの位になるのかね？」

「嫌だわお父さん、未だ健全なお付き合いだよ」

「はっ」

「まあまあ、アッテンボローさんも堅くならないで、家族になるかも知れないんですから」

いや家族には成りたくありませんとは、口が裂けても言えない状態である。

普段の伊達と酔狂で生きているのが嘘のように真剣な状態に成っている。

そして思ったリーファ先輩の戦略にやられたと。

食前酒が運ばれてきて、もうOUTだと知り飲むことにした。

「アッテンボロー君は士官学校の後輩らしいが、何故士官学校へ入

ったのかね？」

「お父様、ダステイーお爺様が730年マフィアと同級生なのよ、それで751年のパランティア星域会戦で戦死してその意志を継いで軍人になったのよ」

「ほう、でお爺様のお名前は何といたのですかな？」

ラザールの目が輝き、質問してくる。

アッテンボローは仕方なく答えることにした。

「母方の祖父なのですが。ダステイー・コツパーフィールドと言います」

「おお、あのコツパーフィールド元帥のお孫さんか」

途端にロボス大将の機嫌が良くなる。

それ以前は新進気鋭のウィレム・ホーランド中尉とのお見合いを進めてきたのであるが、

アッテンボローの祖父が第2次テアマト会戦で活躍した事を知ると、娘よ良くやったと喜び始めていた。

「コツパーフィールド提督には新米の頃にお仕えしたことがあったな。

良い方だった。そうか君が提督のお孫さんか」

ロボス大将は、しみじみと若い頃を思い出しているのだろう。

「まあまあ、ダステイーさんはお酒はいけるんでしょう」
マリーヤが朗らかに話してくる。

「はあ。嗜むぐらいなら」

するとシャルルがにこやかに酒をついでくれる。

「じゃあ飲んでくれ、妹を宜しく頼むよ」

考え込んできた、ラザールが真面目な顔をしてアッテンボローへ話しかけて来た。

「アッテンボロー君。私が言うのも何だが、娘は良い子だと思う。此からも宜しくおねがいするよ。今度ご両親の元へお伺いしなければ成らないな」

慌て出すアッテンボロー。

「いえ、未だ両親には知らせていませんので、何れまたの機会に」
なんとか、誤魔化そうとしまくる。

「もう、ダステイーったら、恥ずかしがっちゃって」

リーファは知ってて、態とシナを作る。

「ダステイーさん、家族と思って家にも遊びに来て下さいね」

「アッテンボロー君。君のような青年がリーファの婿になってくれるのは嬉しい事だ、頼むよ」

ぐわー、リーファ先輩、規定の範囲ですか！

「お父さん、未だ私たち学生だし未成年よ、ダステイーが卒業するまで待つてあげてね」

「そうですね、貴方気が早すぎますよ」

アッテンボローは、お母さん、フォローありがとうございますと心の中で拝んでいた。

「うむ、アッテンボロー君、君の卒業直前にまた話し合おう、宜しく頼むよ」

「そうよお父様、卒業後にしましょうね」

その後次々に出される料理を食べたが、あまり味を覚えて居ないアッテンボローは、

ロボス夫妻と別れて、シャルルの車で士官学校寮まで送り届けて貰った。

「兄さん、ありがとうね」

「ああ、またな」

車が見えなくなると、リーファが笑い出した。

「フフフフ、ダスティー御苦労様」

「先輩、酷いですよ」

「まあ此でお見合い話も潰れたから、OKね」

「お見合いですか」

「そうなのよ。ウィレム・ホーランド中尉とか言う自意識過剰な勘違い男が相手でさうんざりしていたんだよね」

「それで、ダメーが俺ですが、酷いな」

「あら、8割以上は本気よ」

「先輩冗談はよしましょうね」

「女が冗談でこんな事言うと思うの」

「マジ勘弁」

「逃がさないわよ」

「先輩酔っぱらってるんですよね、正気に戻って下さいー」
「逃げるな！」

アッテンボローは遂に壁に追い詰められた。

リーファがアッテンボローの肩を押さえて、いきなりキスしてきた。

「んー」

「ん^」

「プファー」

目がパチクリするアツテンボロー。

「ダスティー、ご馳走様。因みに私のファーストキッスだから」
そう言つて、リーファは颯爽と寮へと入っていった。

残されたアツテンボローは呆然としながら、

押し付けられた柔らかな胸の感覚と唇の柔らかさに戸惑っていたの
であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9323z/>

ロボスの娘で行ってみよう！

2012年1月4日02時46分発行